

## IV 地域社会とメディア

### — 沖縄県宮古島市の地元紙やテレビ局の役割について —

深井麗雄

はじめに

- 1 宮古毎日新聞の概要
- 2 宮古毎日の編集面の特徴
- 3 宮古テレビについて
- 4 地域紙の今後について

おわりに

#### はじめに

那覇空港から南西300キロ、50分ほどで宮古島に着く。東京から2000キロのこの島に注目したのは、全国でも珍しい「新聞環境」にある。人口55,055人(2011年1月現在)の島には独立した日刊紙が2紙ある。宮古毎日新聞と宮古新報で、前者が1万6千部、後者が1万4千部、それぞれが取材陣(両社とも記者は約10人)、販売網、印刷工場を有し、相当の競争を展開している。独特の紙面づくりで全国紙の5紙や沖縄本島の琉球新報や沖縄タイムスの追随を許さない。那覇から300キロで、全国紙や那覇の2紙は空輸に頼らざるを得ない。宮古島の読者宅にこれら島外からの朝刊が届くのは午前10時ごろという。これでは競争にならない。そういう事情があるにせよ、なぜ読者の支持を得ているのか。世界的な「ネットメディア」の勢いは宮古島にも及んでいるのか。あるいは小さな島の新聞づくりのなかに、全国紙や県紙、ネットメディアなどが見

過ごしている、何か普遍的な価値を有するものがあるのではないか。こういう視点から宮古毎日新聞などの新聞づくりや地元CATVの番組作りなどを調査し、地域のコミュニケーションやメディアのありかたを探った。

## 1 宮古毎日新聞の概要

### (1) 沿革

「宮古毎日新聞五十年史」(同社発行)や同社幹部らの話によると、戦後の宮古島に純然たる民間紙として登場したのは1945年12月創刊の「みやこ新報」である。編集は生涯を新聞人として生きた山内朝保と平良好児だった。創刊号はタブロイド版2ページ建て活版印刷だった。その創刊号に掲載した「宣誓」には、戦火で焼土と化した宮古の現実から立ち上がった当時の状況を踏まえ、こう記されている。「幸にして、吾人は自由を得た。今こそ腹ふくるる想ひから憚脱したのだ、与えられた自由を個人の尊厳において伸張し、世界永遠の平和建設に貢献すべき秋が来たのだ。吾人が新聞を発行する所以も亦この要請に応え、平和の基礎に寄与せんとする微衷に他ならない。然し如何にフリースピーチ(言論の自由)とはいえ、自由が我儘と混同せられては、折角の珠玉が身を拘束し不自由となり、各自の生活に不安と脅威とを加え、戦争以上の暗澹たる世界を現出する、結果となろう」<sup>1)</sup>。山内朝保は別のコラムで、戦後新聞人としての出発について「宮古で生まれ、育ち、死ぬであろう吾々は、頭と手とで、永久の平和郷を築き上げる責任がある」と明記している。

翌1946年5月、戦後2番目の新聞「宮古タイムズ」が創刊され、みやこ新報と同様に格調の高い「言論の自由」が一面トップで論じられた。

こうして敗戦から約5年間で十近い新聞が宮古島で生まれた。しかしいづれも小資本で部数も少なかった上、激しい政治的潮流に左右された一面もあり、1年から3年で姿を消した。1955年9月に宮古毎日新聞が創刊された。この頃存続していた新聞は「みやこあさひ新聞」と「南海タイムズ」の2紙だったが

いずれも50年代で姿を消した。

もともと宮古島は戦前から政治闘争の激しい土地柄だった。それは時に司法上の争いに発展し、戦後では異例の判決も出た。

例えば1968年8月30日的那覇地裁平良支部の判決。前年9月の平良市長選挙は僅差で平良重信候補が落選したが「投票に不正がある」と同候補が市選管相手取り市長選無効を求めた裁判だった。真栄田裁判長は「不在者投票の中から154票の不正投票が発見されたがこれは得票差79票を上回った」として選挙管理上の手続き違法を指摘し、選挙無効の判決を下した。この市長選は市民が真っ二つに分かれていがみ合い、反対派には話しかけもしない状況が続いた。結局市選管は琉球高裁に上告したが棄却され真栄城徳松市長の当選は消え、やり直し選挙が行われた。

同様の首長選挙無効判決は1990年6月にも今度は福岡高裁那覇支部で出た。城辺町長選挙が舞台で、西川賢二裁判長は「多数の代理投票の際に投票の秘密が損なわれ、選挙の自由公正が害された」と選挙結果を無効とした。この選挙は自民党推薦の新人が対立候補を42票の僅差で敗ったという際どい結果だった。結局この時もやり直し選挙が行われ自民新人候補が今度は大差で当選した。投票率は97.25%だった。この選挙で27年間続いた城辺町の革新政権は敗れ2005年の5市町村合併まで16年間、保守町政が続いた。

こうした政治的対立が地元の新聞に与えた影響の大きさは想像に難くないが、宮古毎日がこのような潮流をのりきり、紙面を充実するとともに、販売体制を確立し現状に近くなったのは、沖縄が本土復帰し10年余りたった1980年代後半である。

## (2) 宮古毎日新聞の紙面について

ブランケット版の朝刊でほぼ10ページ。購読料は1か月、消費税込で1785円、一部売りは65円だ。カラー紙面は通常1面と終面の2ページ。原則月曜日は休刊している。各面の内容は次のとおりである。事例として2011年12月1日

付紙面の内容を示した。宮古島市周辺のニュースを拾いながら、那覇支社による那覇など沖縄本島の動きを伝える一方で、時事電による全国ニュースと提携先の毎日新聞の記事を引用しながら紙面構成している。

▽1面 地元のニュース

- ・トップ記事は「漁業再生で意見交換—下地市長と若い漁業者」  
宮古島市水産課主催事業で、宮古島市長と青年漁業者の意見交換会のやりとり。
- ・2番手は「首相の陳謝の知事が嚴重抗議」  
不適切発言をした防衛相局長の更迭を受け陳謝した野田首相の発言に対し、沖縄県知事が那覇市内で嚴重抗議した。
- ・このほか宮古島市内のニュースを2本（クリスマスものとイベント）収容。平良市長ら地元市村長の動静と「行雲流水」というタイトルのエッセイを掲載している。

▽2面 沖縄県外の国内ニュース

- ・トップ記事は「総務省発表による「2010年の政治資金収支報告書」企業献金は過去最低更新などを表付きで紹介。
- ・2番手は「党首討論」  
野田首相と谷垣自民総裁の攻防を掲載。  
(注) 紙面の下半分は「喪中につき年末年始のごあいさつを遠慮させていただきます」との「欠礼広告」を個人名で19本掲載している。

▽3面 同上

- ・トップは「福井女子中学生殺害事件で前川さんの再審開始決定」
- ・毎日新聞1面のコラム「余祿」を転載。

▽4, 5面 国内外のスポーツニュースで主に時事電。4面の下部にはBSデジタル放送の番組欄をコンパクトに収容している。

この日、4面トップは「稀勢の里、悲願の大関昇進」で、5面トップは「新人王に沢村」

▽6面 曜日によって異なるが、地元ニュースや国際ニュースと地元住民の投稿。

投稿は地元の識者だけでなく、幅広い分野の市民が世代を問わず登場する。

この日は琉球大学の医師が「排尿ケア」に関する地元での公開講座を紹介している。

▽7面 「ひろば」と題したミニニュース紙面。

トップは「きょうの催し」で毎日10本前後。この日は公開講座や無料法律相談、「いきいき教室」など。このほか各地の予定を知らせる短行記事を網羅するほか、「募集」や「差し上げます」、「きょうの運勢」、離島航路や空の便のダイヤを掲載している。

▽8、9面 いわゆる社会面で島内の出来事を網羅。ただし小さな島なので事件はさほどなく、ほとんどが「町だね」や行事、地元スポーツの結果などである。

### (3) 社内体制

平良覚社長<sup>2)</sup>によると社員は約30人。これとは別にバイトの高校生ら70人がいる。

締め切りは1版制で、通常20時30分。ナイターで遅くなることもある。編集体制は後述するが、原稿は自前原稿のほか、時事配信に加えラテ番組（週刊テレビガイドも含め）は日刊編集センターから受けている。また前述のごとく、10年以上前から毎日新聞と提携し、論説的な原稿や1面コラム「余禄」などを転載している。ちなみに競争紙の宮古新報は読売新聞と提携している。

#### (4) 宮古毎日の主催事業

絵画展やスポーツイベントなど新聞社主催の各種事業は収益目的はもちろんだが、社会貢献や読者獲得など様々な役割を担う重要な分野である。宮古毎日の場合、平良社長によると、最盛期は14, 5件あった。今も13件ある。書道展は1500点の作品が集まる。囲碁は全宮古本因坊戦で50, 60人は来場する。7月はサマー囲碁フェスティバルも行う。全宮古ゴルフ大会は同社で最大の事業。地域の活性化にもつながるといふ。少年サッカーの参加者は350人ほど。父兄も1000人くらい観戦にくる。こういうイベント情報はほとんど、新聞で流す。平良社長はこう言った。「宮古島ではネット情報で人が集まるケースは極めて少ない」。この何気ない一言は極めて重要だ。地域紙としての宮古毎日新聞の役割を十二分に示唆しているこの点については後で詳述したい。

#### (5) 宮古島の新聞界の特徴と販売・配達体制

宮古島の新聞業界の特徴は、新聞配達や集金などを請け負う販売店がないことだ。販売店があると新聞広告がチラシに転化しかねない。通常、新聞に折り込むチラシはその利益の大半が、配達する販売店に入る。つまりチラシへの転化は、利益が新聞社から店に転移することを意味する。だから販売店を設けず、新聞社本体が利益を囲い込むわけだ。さらに新聞社で販売を直接コントロールする利点は、苦情処理が速くて丁寧な点だ。同社の場合、部長クラスが直接読者対応してその日のうちに処理する。一方、広告面では訃報広告が多い。これを全国紙や県紙に回さないようにするのが地域紙の腕だと、営業畑出身の平良社長は言う。もう少し同社の販売や配達の事情を見てみたい。

販売担当の部長、田中昭彦氏は16年前に来島した。それまでは横浜で営業一筋に仕事をしていて、リストラにあった。妻が宮古島の離島の池間島出身でその縁で夫婦で引っ越した。

販売担当社員3人の仕事は配達体制の管理と1日1, 2件ある苦情への対応だ。苦情内容は①遅配、未配②「自分たちを取り上げた記事の扱いが小さい」

——など。電話や配達人に直接言う場合と本人が本社まで乗り込んでくるケースもある。

配達のバイトをする、いわゆる新聞少年は 4, 5年前まで宮古市内で50人ほどいたが今は10人くらい。昔は貧しい家庭の子が多かった。今は親が「成績が下がる」と配達業務をやらせなかったり、「携帯のためのバイト」などで、長続きしない。

一方、増えたのは主婦。生活のためだ。配達バイトの時給は農家の最低賃金と同じ600円くらい。20年、30年も続けるベテランが多い。慣れた人で一人当たり約200戸に配達する。配達にもプロとアマがいる。たとえば台風。いつも通りビニール袋に入れるが、ポストのない家や雨戸のしまっている家のどこに新聞を置いたらよいか、「プロ」は知っている。

田中さんは他府県の新聞販売店と同様に、飛び込みで読者宅を回る。土日の作業で一日に50軒ほど訪ねる。「これをやらないと読者の顔を覚えられない」という。ただし無茶な勧誘はしない。

## 2 宮古毎日の編集面の特徴

### (1) 宮古毎日の編集体制

編集部長の平良幹雄氏によると、記者は8人、プラス校正係1人で計9人(30代後半が多い)。週休2日なので常時6人が取材をしている。整理制作部5人だ。

5年前までは6市町村に1人ずつ配置し、それぞれ議会、学校、警察、行事などを取材していた。しかし2005年の市町村合併で宮古本島、池間島、来間島、伊良部島、下地島大神島の6島は宮古島市に、多良間島、水納島の2島は宮古郡多良間村になった。その結果、それまでの地区ごとの特性が薄れ、今は農水産業、観光、政治・教育、スポーツなどで分担している。ただしデスクがない。取材記者でもある平良編集部長が兼務しているようだ。那覇支社に記

者が一人と多良間村に連絡員が一人いる。

平良編集部長によると、ある時期まで記者がなかなか定着しなかった。本土からの記者が半分くらいいた時期（当初は観光やダイビングなどで来た）もあった。今、本土出身者は一人。10年選手でもともとオペレーターとして入社。記者に転向して4年目である。

平良編集部長によると、本土出身者は宮古出身と違った視点で見る。たとえば小型魚のスク。島で育った記者は漁獲の写真しかとらない。しかし本土出身者はスクの群れ泳ぐ写真をとる。そのほうが美しいからだ。自然の美しさや豊かさは、島の人間のほうがかえって鈍感かもしれない、という。

## (2) 地元2紙と県紙などの取材競争

地元2紙の共存体制だと、「取材上の競争原理が失われてしまうのではないか」との危惧があるが、現実には一定程度の取材競争は行われている。例えば平良部長はここ10年間の宮古毎日の独自ニュース（いわゆる特ダネ）として以下の2件を示した。

### (a) 西原の産廃問題

2001年11月28日、宮古島市平良字西原の産業廃棄物処分場で火災が起きた。煙が出ているのを見つけたのは宮古毎日の記者だった。他紙の記者はただの火事と判断して本社に引き返したらしいが、宮古毎日の記者は引き続き取材した。古タイヤが燃え付近の住民が一時避難する事態になった。不法投棄のごみが3-4日間燃え続けた。宮古毎日では翌朝紙面で1面と社会面を埋め尽くして大きく報じ、避難した住民にも配られて読まれた。他紙には掲載されなかった。

処分場は県が管理し、市はノータッチだった。当然、関係業者への行政指導にしても、県と市で認識に差があった。この問題はその後、住民闘争に発展し、訴訟にもなった。

訴訟は地元住民88人が「健康被害などを受けた」として、処理業者と、



監督責任をもつ県に対し、約6000万円の損害賠償を求めた。2007年3月那覇地裁で判決があり、業者に総額2500万円の損害賠償が命じられた。

新しい処分場の建設が西原地区で進められているが、地元住民の不満は尾を引いており2011年9月12日、大浦自治会が県知事に対し、建設中止を申し入れている。住民によると「大火災から今年で10年。火災の後半年も煙や悪臭に悩まされ、サトウキビの収穫や日常生活にも大きな被害を受けた。それなのに、火災を起こした処分場の隣で、何の相談もなく新しい処分場建設が始まったのは許しがたい」と反発した。この問題はまだまだ紛糾しそうで、行政担当記者の腕のみせどころだろう。

(b) 宮原地区の圃場整備補助金不正事件

灌漑や排水整備工事が舞台。工事がまだ終わっていないのに終わったように見せかけ、国から補助金を受けとったことが2008年に発覚し、市の職員4、5人が懲戒処分を受けた。平良編集部長によると、職員は業者とも癒着しており、工期の遅れにあせって書類をごまかし検査に合格したように見せかけた、という。記者が酒の席で噂を耳にしたのが取材の端緒だったらしく、これが独自報道に結び付いた。典型的な調査報道といえるだろう。

(c) その他のケース

前記二つの出来事は平良部長に語ってもらったケースだが、もちろん競争紙の宮古新報が特ダネをはなつケースもあり、現場の複数の記者によると、かなりの緊張感で取材しているのがうかがえる。これは那覇から赴任している琉球新報や沖縄タイムスの記者も同様で、例えば沖縄タイムス社宮古支局の与儀武秀記者によると、2011年3月から7月にかけて他紙の記者に抜かれたニュースは以下の2本という。

[ケースA] 2011年3月28日付け宮古毎日朝刊

「葉タバコの手伝いしたい」

[ケースB] 2011年4月11日付け宮古毎日朝刊

「震災の被害者、大石さん一家宮古へ」

逆に与儀記者が抜いたのは次の記事だ。

2011年5月26日付け沖縄タイムス朝刊1面肩「宮古・東平安名崎にリゾートホテル計画」

### (3) 写真や活字について

#### (a) 集合写真の多用

平良部長によると、宮古島でのスポーツイベント記事で、記者はプレー写真を出稿するが、読者は集合写真を好む。人が多く載ることが大切だという。あまり読まれない会議物の記事でも、写真は記事より注目される場合がある。誰が出席しているかに読者が興味をもつからだ。見出しに個人名をとるケースも多い。

ここで注目されるのは、イベント記事の写真の撮り方だ。例えば市内にある劇場での演劇の写真は、通常舞台での俳優の演技が素材だ。しかし、宮古島では時に舞台写真ではなく観客席の写真が紙面に掲載される。主客転倒のようだが、実はそうではない。「観客」が「主体」なのだ。これは極端な例だが、地元紙の特徴や視点を象徴している。なお掲載写真は翌日本社で提供するサービスもある。L判89センチ×127センチで1枚500円だ。

#### (b) フォント（文字）

フォントも大きくした。新聞協会の加盟社中一番大きいという。その結果15段組みから12段になった。

### (4) 論説機能について

宮古毎日には社説がない。このことを批判するのは容易だが、少ない陣容で社説を毎日掲載するのは至難だ。しかし「行雲流水」というコラムがあり、これが論説機能を補完しているように見える。ベテラン記者が交代で執筆している。10人ほどの記者で日々の紙面づくりをしているのでコラムを毎日掲載する

わけにはいかないが、2010年でみると、年間66本掲載している。その一部は執筆者の個人的な思いなどが綴られているが、大半は全国紙や県紙でいう社説に近い主張が盛り込まれた文章だ。

例えば同年3月13日付紙面のこのコラムのタイトルは「在日米軍の駐留経費」だ。コラム子はまず「連日大々的に報道される米国海兵隊の普天間飛行場移設問題に耳目を惹かれてか在日米軍駐留経費負担のいわゆる思いやり予算に対する県民の関心や反応は薄くなっているようだ」と嘆く。さらに「法的根拠のない経費負担に毎年日本国民の莫大な税金が費やされているというのにである」と述べる。その上米国の市民がどれほど実態を知っているかについて県紙のワシントン通信員がレポートした中身を紹介している。それによると「米国の主婦らに在日米軍の光熱費から建設費などまで年間およそ6000億円を日本は負担しているという“まさか!”と絶句した」という。「米兵の県民に対する傍若無人な振る舞いには“俺たちは日本国民のために金を使い命をかけて守ってあげている(いちいち)文句を言うな”的心理が働いているのではと通信員は指摘する。同感である。」と断じている。

また5月10日のコラムは「米軍基地の県内移設にNOの沖縄」と題し、県内移設反対の立場を明確に述べている。コラム子は最後にこう述べる。「沖縄は400年前の薩摩侵攻、130年前の琉球処分、今次大戦の本土の防波堤、日本独立の擬制、復帰後も基地の押しつけなどの歴史を負い続けている。(中略)ふたたび屈辱の日にならないことを祈る」と記している。

こうした論説的なコラムは政治的なものに限定されず、地元の文化伝統まで多岐にわたる。とりわけ伝統や方言に関するこだわりは強い。2010年5月19日付では「古謡の保存」と題して「生活の中で生まれ、共同体の平安や豊穡を祈り、歌われてきた歌謡には故郷の香りが染み込んでいる」と主張する。記事のきっかけはこの年の3月に沖縄本島で開かれた「沖縄の古謡コンサート」(~黒潮がつなぐ島々の古謡~)だった。この大会で宮古島の久松地区に伝わる「野崎トウガニ」という古謡を地元の住民が歌い、その古謡がいかに地元の文化に

根差しているかなどについて紹介している。

また9月15日付コラムのタイトルは「海上に響く“なりやまあやぐ”」だ。「なりやまあやぐ」は古くから伝承されてきたが、たまたま1960年、地元の1人が琉球放送の素人のど自慢大会で歌ったのを契機に、人々を魅了して「たちまち世に広がっていった」という。この民謡には謎が多いが地元では「なりやまあやぐ調査委員会」が結成され綿密な調査研究が行われた。そのうえでコラム子はその魅力について「この歌の魅力は曲の美しさにある。ゆったりと重厚に語りかけるように心に沁みこんでくる。この旋律にのせて個人的な心情を即興的に口ずさんだ人々もいたに違いない」と述べている。このコラムの直後に予定されていた「なりやまあやぐ」の祭を紹介し、コラムは「誇り高い文化の祭典である」と記している。それから5日後の9月20日付のタイトルは「ロマンに満ちた仲秋の名月」である。竹から生まれたかぐや姫が8月15日満月の夜、月の世界に帰る—というロマンに満ちた物語に似た伝説が宮古島でも伝えられており、それを紹介している。

一方、コラムではたびたび宮古の方言について触れている。例えば2006年3月24日付のコラムのタイトルは「宮古方言弁論大会」である。この大会はその12年前に平良市文化協会が始めたという。宮古の方言に限定した発表大会は県内初で、会場には多くの市民が駆け付けた。当時の大会要項によると「メディアの発達普及によって情報の発信源は中央に一元化され日常生活の知恵までが中央発信の情報に依存して、中央はすべて上位にあるとの屈折した価値観まではびこらせている。それ故に若年代から使用不能な言葉として敬遠されている方言の真価を今一度再確認するため企画した」と述べている。大会は島中の話題をさらい、以来毎年続いている状況をコラム子は淡々と綴っているが、行間には明らかに、メディアの中央一元化への反発と宮古島住民のアイデンティティ重視が見える。

同様の傾向は別のテーマでも現れる。例えば2010年7月31日付でコラム子は「報道の付和雷同化」というタイトルで、東京発信のメディア情報について疑問

を投げかけている。まず米海兵隊の普天間飛行場移設問題について触れ「沖縄県民の声よりも米国防省や国務省高官の発言に過剰とも思えるほどに逐一反応し、米政権の意向に反すればまるで我が国は外敵から攻撃されるかのごとく強調する閣僚の発言をおうむ返しに後押し報道している。」との疑問の声を紹介。一方で琉球新報のワシントン特派員が「不況で生活に苦しむ米国民の不満は膨大な軍事費に向かい、在沖米海兵隊の不要論も湧き上がっている」と報じた最新情報を「強き者にも付和雷同しない報道の本領」と高く評価した。ここにも中央メディアへの反発や疑念がうかがえる。

もう一つ、論説的な記事として機能しているように見えるのが意外にも、読者の投稿だ。宮古毎日にしろ、宮古新報にしろ、読者の投稿が掲載される。それも結構長文で50行から100行前後だ。しかもかなりバランスを意識して掲載している。その好例が2011年6月22日付けの宮古毎日の見開き6面（右面）と7面（左面）である。まず右面では「平和を守る自衛隊の皆さんに改めて感謝」とのタイトルで市民の一人（自衛隊協力会の会員）が同会の定期総会を機に執筆している。「宮古島に自衛隊が配備されて38年」とし、「自衛隊の皆さん、今後とも私たちの安全のため、日本の平和のために、お仕事を頑張ってください」と述べている。

ところが左面の投稿は趣が異なる。別の市民が「平和の誓いを捧げる慰霊の日」とのタイトルで沖縄県主催の沖縄全戦没者追悼式にちなんで書いている。「私たちは先の大戦を教訓に常に政治の動向に目を光らせて平和維持に監視の姿勢を持ち続けることが肝要である」としたうえで「そのためには、家庭にあっては子や孫に戦争の恐ろしさを教え、学校にあっては命を大切にす平和教育の教えも重要である」と主張している。最後は「一日も早く沖縄から米軍基地を取り払う政治であってほしい」と締めくくる。

結局、宮古毎日新聞は取材執筆要員が少ないため、社説や独自の論説記事はないものの、上記コラムと毎日新聞からの論説的記事の転載、読者投稿の3本柱で補完していることになる。

(5) 宮古毎日のミニニュースについて

紙面の特徴のひとつは明らかに7面の「ひろば」だろう。しかもその緻密さは同じミニニュースがネットにどれくらい載っているか、換言すればネットにも載っていない情報をどれくらいこまめに拾っているか、を調べると明らかになる。

宮古毎日新聞「伝言板」コーナーのミニニュース分析

平均的な紙面のうち2011年11月19日から1週間の紙面を調べた。

○11月19日（土）

この日の紙面が大阪の関西大学内研究室に郵送されてくるのは早くても20日。土日は学内便が休みなので研究室着は月曜の21日。したがって21日からニュースをネット検索した。検索対象は19件。うちネット掲載は次の2件だった。

- ①「税を考える集い」（申し込み先は沖縄宮古法人会）
- ②「宮古島災害フォーラム」（問い合わせは宮古島青年会議所）

以下同様に。

○11月20日（日）の検索対象は23件。うちネット掲載は6件。

- ③「暮らしの無料法律相談会」  
(問い合わせは県民生活センター宮古分室)
- ④「年末調整等説明会」（同、宮古税務署）
- ⑤「第7回宮古島生涯学習フェスティバル」  
(同、市教育委員会生涯学習振興課)
- ⑥「同フェスティバルミニサッカー参加チーム募集」（同上）
- ⑦「宮古島地域住民における健康まちづくり  
・知っておきたい排尿ケア講座」（同、問い合わせは個人）
- ⑧「宮古島ライオンズクラブゴルフコンペ」（同、ライオンズクラブ）

○11月21日（月）は休刊

○11月22日（火）の検索対象は19件。うちネット掲載は5件。

- ⑨「スローフード研究会」(同、個人)
- ⑩「平良中学13期卒同期会」(同、個人)
- ⑪「無料人権相談所」(同、那覇地方法務局宮古島支局)
- ⑫「宮古島生涯学習フェスティバルミニサッカー参加チーム募集」  
(同、市教育委員会生涯学習振興課)
- ⑬「キッズマンンテインバイク大会」  
(同、アスリートサイクルショップ)

○11月23日（水）の検索対象は25件。うちネット掲載は3件。

- ⑭「国際書道展」(書道展実行委員会)
- ⑮「宮古島地域住民における健康まちづくり  
・知っておきたい排尿ケア講座」(同、問い合わせは個人)
- ⑯「うえのドイツ文化村施設の指定管理者募集」(宮古島市役所観光課)

○11月24日（木）の検索対象は24件。うちネット掲載は4件

- ⑰「沖縄大学土曜教養講座」(沖縄大学地域研究所)
- ⑱「キッズマンンテインバイク大会」(同、アスリートサイクルショップ)
- ⑲「新潟県豪雨に伴う義援金受付」(日本赤十字社沖縄県支部)
- ⑳「全日本トライアスロン宮古島大会ボランティア募集」(実行委員会)

○11月26日（土）の検索対象は27件。うちネット掲載は4件。

- ㉑「宮古島地域住民における健康まちづくり・  
知っておきたい排尿ケア講座」(同、問い合わせは個人)
- ㉒「島倉千代子コンサート」(宮古毎日新聞社)
- ㉓「キッズマンンテインバイク大会」(同、アスリートサイクルショップ)
- ㉔「伊良部島マラソン参加者募集」(同、スポーツショップ)

結局検索対象総数は137件、うちネット掲載は24件、17パーセントにとどまった。これを同じ時期の毎日新聞と比較してみる。

11月23日付毎日新聞（大阪本社版）23面大阪版の「イベント編」について

- ・掲載ミニニュースは大阪市内 7本
- 河内地区 6本
- 泉州地区 2本
- 北摂地区 13本

以上でネット非掲載は北摂地区の「絵本の時間」（千里図書館）の1本のみだ。

比較すると、宮古毎日がいかにミニニュースをまめに拾っているかがわかる。平良社長がインタビューで「この島ではネット情報で人が集まるケースは極めて少ない」と述べた点が象徴的だ。少なくとも宮古島では、新聞がネットよりも市民の重要なニュースソースになっている、という仮説が成立するように見える。高齢化がその原因の一つではないかと推測できるが、65歳以上の人口比率を調べると、宮古島市は22.8%（平成17年国勢調査）であり、日本全体で22.0%（国立社会保障・人口問題研究所の2010年の推計）というデータと大差ないことがわかる。だから高齢化という要因は排除できる。その他の要因として、市民でパソコンを所有している人が本土より少ない、などの点が推定できるが、この点については別の機会に譲りたい。

しかし後述するように、地元の宮古テレビの「インターネット加入世帯数」は漸増している。それがそのまま「ネット優位」につながらない点が興味深く、それを以下の教育記事の関連で検討したい。

## (6) 教育記事の重要性

宮古の2紙で気づくのは学校教育関連の記事が多いことだ。特異な産業や大企業が立地するわけでもなく、高校生のお大半は進学や就職で島外に出るというこの島の実情を見れば島民の教育に掛ける情熱は離島ならではのものを感じさせる。創立80年余りの宮古高校でいったいどれくらい同校関連の記事が多いかを調べた。



宮古高校は沖縄県立第2中学分校を前身とし、多くの実績を残す拠点校だ。川満健校長によると進路面では国公立大学や有名私大へ多くの進学実績を残し、2011年春には、国費制度以外では初めてとなる、現役での東京大学合格も実現した。課外活動も活発でここ2、3年でサッカー部が県大会で優勝したり、ラグビー部が準優勝し、文化部も吹奏楽コンクールなどで金賞などを受賞している。

そこでこうした宮古高校の関わるニュースについて、2011年4、5、6月の3か月間、地元2紙の掲載状況をみた<sup>3)</sup>。4月は21件、5月は31件、6月は27件の記事が載っていた。「県春季高校野球宮高ベスト4ならず」などのスポーツ記事に限らず「マウイ交流から帰島」（4月9日宮古新報）、「被災者支援で350人参加」（4月10日宮古毎日）、「野球部にボール寄贈」（4月19日宮古新報）、「地区校長会大型連休向け注意喚起」（4月22日宮古毎日）と多彩だ。このほか宮高生が海外交流に出かけたり、平和集会の開催から「フラダンス交流」まで多岐にわたる。しかも同じニュースがほとんど例外なく宮古毎日新聞と宮古新報の2紙にほぼ同時に掲載される。

川満校長によると、同校のホームページにも情報はアップしたいが、それを担当する教員が忙しく、なかなかHPの頻繁な更新まで手が回らないという。そこで連絡ひとつで気軽に取材してくれる2紙が貴重な役割を果たすことになる。

そうした学校イベントを2011年7月9日午前9時—10時の間、宮古島市内の平良中学体育館で取材した。案内してくれたのは宮古毎日新聞の販売部の新聞少年、川満匠君で、中学生の大縄づくりだった。

校長の伊志嶺吉作氏によると、大縄は7月20日の終業式の後、夏休みに入つてすぐの時期に行われる宮古祭で使われる。毎年地区ごとに作るが、平良中学でやるのは今年が初めて。去年北中学でやり、「うちでもやったら」と父母から声が上がリ、PTAで3回話し合せて決まった。「子供たちに祭りに参加してもらい、経験を伝えたい」との趣旨だった。取材当日、生徒は2年生と3年生で計

350人くらい来ており、保護者も30人ほど来ていた。祭に使う縄は直径1メートルで男綱、女綱とも長さ60メートル。この日は3本の縄をより合わせて直径10センチの綱をつくる段階だった。4人一组で3人がより合わせ、一人ができた綱を引き上げていく役割だった。ある一団を見た。教師の一人が一通り手順を教え「さあ、やりたい人、並んで」と声をかけると、それまで床にすわって聴いていた生徒約30人の中から、次々に10数人が立ち上がって列を作った。動作が速く、並の大学生よりよほどスピーディだ。

保護者の一人、豊見山直美さんに聞いた。次女の奈澄（なち）さん＝3年生＝の作業を見ようと、8か月の二男を抱いて見にきたという。豊見山さんの出身地である上野地区では大人だけが縄づくりをしていたので自分には綱づくりの経験がなく、興味がわいたらしい。「宮古には祭りが少ないので、子供たちにとってこういう体験は貴重だと思う」と話した。

さらに宮古青年会議所の来間勇人氏は意外な背景を説明してくれた。「地区の祭りに子供たちも積極的に参加させようと、この事業を始めた。実は、子供達の将来のUターンを見すえているからだ。青年たちのほとんどは一度は島を出るが、半分以上は25、6歳になると戻ってくる。親の面倒を見ることなどが理由だ。子供のころにこういう行事に参加して地区の大人たちと交流していれば、Uターンした時も、地域に溶け込みやすい」と話した。

こうした現場を取材したり、宮古毎日の平良編集部長や川満校長の話を総合すると、宮古島ではまだ学校が地域の重要な核になっていることがわかる。学校は教育の場であると同時に人々の情報交換の場であり、子供たちの教育をともに支援するという共通の目標からくる連帯感と達成感を共有する場でもあるのだ。

そこから見えてくることは、人々に必要な地域のニュースは単に宮古高校のような教育現場を舞台にしたものに限らない、ということだ。地域共同体の核となりうるような、学校以外の組織や「場」（たとえば公民館や商店街、学習塾）を舞台にした情報がそれであり、さらにそこで宮古高校のような様々な事

情でネット発信が困難であればあるほど、地域紙の存在価値は大きいということになる。

以上のような考察は新聞だけでなく、地元のテレビ局にもいえそうだ。以下でそれについて述べたい。

### 3 宮古テレビについて

#### (1) 沿革

宮古島でテレビの開局要望が強まったのは東京オリンピックのころである。もともと沖縄本島のテレビ放送は沖縄テレビが1959年開局、NHK沖縄1968年に開局した。しかし、宮古島や石垣島などの先島地域は沖縄本島からのテレビ電波は届かなかった。それは宮古島と本島が約300キロ離れているためだった。俗説があった。気象条件などにより宮古島の場所によってはテレビ番組がまるで蜃気楼のように微かに画面に映るのだという。「アンテナを高くすればもっと鮮明に映るのではないか」などの話がまことしやかに交わされた。

こうしたテレビへの関心が頂点に達したのは東京オリンピックだ。たまたま宮古島の電器店が店の屋上に高いコンクリートの柱を建てアンテナを設置したところオリンピックの1か月前に、テレビ電波の受信に成功した。電波の受信状態は日中より日没後のほうがよかったという。この噂を聞いた市民が電器店をたくさん訪れオリンピック開催の2週間で、延べ2万人がこの店でテレビを観戦した。

宮古島のテレビ局が開局するための「布石」はもう1つあった。この電器店が別に設立した親子ラジオ局がそれだ。また池間島には55年続いた日本一小さいラジオ局があった。島民800人のほとんどが加入する親子ラジオだ。システムは親局と家庭（子局）を有線でつなぎ、放送局の放送や地域のお知らせなどを流すシステムだ。戦後の沖縄は電力事情が悪いうえ、ラジオ受信機が高価で、なかなか普及しなかった。そこで琉球米国民政府が親子ラジオ局に資金を

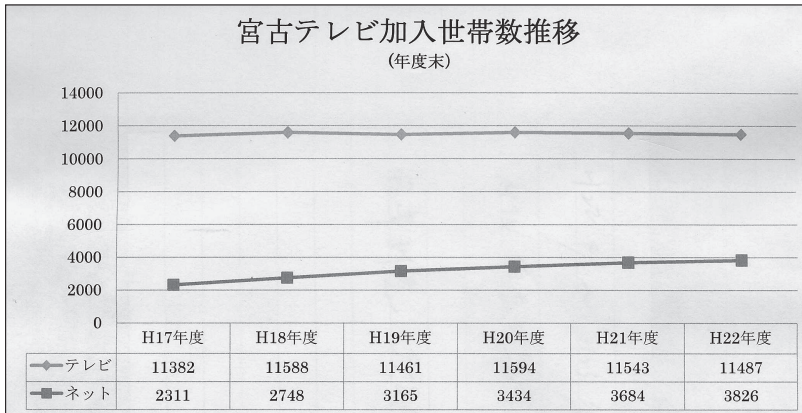


図1 宮古テレビ加入世帯数(H22/3月末)  
出所) 宮古テレビ提供

援助し始め、一時は沖縄と奄美で12万台の加入があった。その後ラジオからテレビへと時代が変わり、ほとんどのラジオ局は昭和60年ごろまでに姿を消した。

時代は耳で聞くラジオから、目で見るとテレビへと変化し宮古テレビの開局する条件が整いつつあった。宮古テレビは1978年5月1日に開局した<sup>4)</sup>。CATVの1つで開局時の加入者は789所帯加入目標は3500所帯だったがなかなか達成できなかったうえ、RBCやOTVの放送開始で平成6年ごろから解約者が続出し加入者数は約1000所帯減った。まさに会社存亡の危機だった。しかしその後の営業努力と自主番組の制作などで加入者はその後伸び平成20年12月現在の加入者は1万1642所帯、加入率は59%にまで伸びた。さらに光ファイバーを使ったインターネット事業は平成13年4月からスタートしたが、別表のごとくその加入者は平成20年12月で3438世帯まで伸びた。こうして平成19年度宮古テレビの売上高は約7億9000万円、系列会社4社を含めると12億9000万円に上る。ちなみに平成22年度の単体決算は売上8億6400万円(加入料5億1200万円、CM料9600万円、ネット事業1億3700万円)で経常利益は1億21万円。経常利益率

は10%の大台を超え、小さな企業規模ながらも利益率の高い経営が行われている。

## (2) 制作体制や自主番組について

社員は約60人で報道部のスタッフは井川彦三（げんぞう）係長ら9人でここが中心になって自主番組を制作する。井川係長は2000年4月入社。岡山県出身。琉球大に進学し就活で宮古テレビに受かった同期生は7人。現在残っているのは3人という。

### (a) 自主番組

#### ・ニュースライナー

月一金曜、30分 7時半から8時、朝は「MTVモーニング」で30分、ニュースは3分の1、子供の紹介もする。

#### ・土曜 「ニュースウィークリー」30分

・土曜 「サンダル」30分、2010年から開始。軽いノリのどこかを訪ねたりする情報番組。

#### ・土曜 「アガンシャ」、バラエティ番組

・日曜日 「サンデイトピック」、報道特集的な番組。日々のニュースの中から問題点を取り出す。もっとも手間をかけた番組という。

このほか「イチカメスポーツ」や「見てみて見て」（市民劇場であるマティダ劇場での芸能や公演を収録した番組）

#### ・方言ニュース。

週1回、15分。おばさんが方言で町の話題を語る。5年前から開始。土曜の夜8時に放送し、日曜に再放送する。同じような番組は、沖縄本島のRBCのラジオでもあるが、他の民放で作れない独自の番組を増やしたい、という思いから様々な工夫をこらす。例えばわざと字幕は入れない。子供たちにはわからないが、まわりの大人から教わりながら観る。

出演のおばさんは地元の八千代バスのバスガイド、与那覇冴子さん<sup>5)</sup>。地元のひとはあまりバスには乗らない。しかし、還暦の人が集まったり、島で行う同窓会に毎年結構人が集まり、観光バスを使う。その際、与那覇さんに宮古の言葉でガイドしてもらおうと受けて爆笑が起きる。ここでも宮古毎日新聞と同様、地元の言葉に対する執着が見える。

#### (b) 宮古の言葉

宮古と那覇では言葉がかなり違い、昔は通じなかった。1390年の話。宮古島から有力者が沖縄に渡った。琉球王朝の王にあいさつに行ったが、言葉が通じなかった。そこで3年くらい那覇に住んでようやく通じるようになったという。現在、50代の市民は、宮古の言葉を話したり聞いたりできる。しかし、40代くらいまでは、聞くことはできるが話話できない。井川係長の妻（35歳）も聞くことはできるが話すのは無理。多良間島と宮古の言葉も違う。若い人も意外と方言を使う。周りの人と集まることが多いからだ。

## 4 地域紙の今後について

宮古毎日新聞や宮古テレビの現状を検討してきた。これまでみたように現在はネットと比べ、まだ「新聞やテレビが優位」だが、今後、パソコンなどネット関連機器の普及で、宮古毎日新聞は一定の影響を受けるだろう。その際、前述したように、地域共同体の核となりうるような組織や「場」に注目する必要がある。学校現場のように、表向きはパソコン環境が十分であっても、要員不足が原因でネットで情報発信できるとは限らないからだ。そういうニーズを掘り下げ、新聞社の要員事情の許せる範囲でミニニュースをもう少し加工度の高い原稿に仕上げることも必要になる。そこでネットと差をつけるわけだ。

ちなみに筆者が宮古島を訪れた2011年7月末、小さな音楽会の予告記事を宮古毎日で知り、その主催者にインタビューした。その結果をミニニュースに付

加するかたちで原稿にし、8月初め、投稿原稿として同紙に掲載してもらった。ミニ情報を加工する道を探るよすがとして引用したい。

#### 宮古毎日新聞寄稿原稿

高名なチェリストと島の子供たちのジュニアオーケストラが織り成す名曲。8月6日のサマーコンサートに、私が「おやっ？」と引っかかったのは、次の一言だった。

「ポイントは、たった1回しかない直前リハーサル、それも最初の一瞬です。コンサートの出来はそれで決まります。生きる力の強いもの同士が、どう真剣勝負するかです」。

そう話すバイオリン指導者の天野誠さんは、私に音楽の隠れた面白さを教えてくれた。

この御仁は相当変わっている。五十の坂にさしかかった五年前。観光で訪れたこの島に、妻の智美さんがはまってしまった。「私はこの島で暮らします」。ずっと東京で活動していた天野氏にとっては、青天の霹靂だったにちがいない。

しかし氏はあわてなかった。何度も東京と島を往復し、慎重に移住作戦を練った。そして五年前。ついに引っ越し、夫婦でバイオリン教室を開き、宮古島ジュニアオーケストラを創設し、と矢継ぎ早に子供たちと「協奏」してきた。

しかしこのことで「相当な変人」と書いたのではない。プロの音楽家なのに、「真剣勝負」の舞台裏をあげすげに話してくれたからだ。

氏によるとこうだ。ソリスト（独演奏者）とバックのオーケストラ、その両者をコントロールする指揮者の関係は実に微妙だ。ソリストが「ここはゆっくり弾こう」と思っても、オーケストラがついてきてくれないと、音がずれる。これはまずい。

が、普通の聴衆はこのずれが誰の責任かまではわからない。そこで指揮者は考える。「ソリストを裏切ってもオーケストラを助けよう。ここで貸しを作っ

たら、また、お呼びがかかるかも」

ふむ、芸術の世界とはいえど、人間の生臭い計算は縦横にはたらいっているようだ。

今回のコンサートで子供たちと共演する林峰男さんは、日本の代表的なチェロ奏者だ。前日の五日の最終便で羽田から那覇入り。翌朝便で昼前に宮古島着。開演まで一時間だけ、真剣勝負のリハーサルをする。

林さんは子供のころはガキ大将で個性の豊かな人だという。一方の島の子供たちも、都会の子供に比べ、実に伸び伸びと演奏する。両者がぶつかりあってどうなるのか。天野さんにも読めないらしい。

▽日時 8月6日午後3時

▽場所 宮古島マティダ市民劇場

▽演奏は宮古島市ジュニアオーケストラ、チェロの林峰男さん、バイオリンの岡田光樹さん、指揮は天野誠さん

▽曲目はチェロ協奏曲ハ長調（ハイドン）沖縄行進曲など

▽入場料は無料

## おわりに

2011年9月25日、台湾で開かれた国際新聞編集者協会（IPI）年次総会で宮城県石巻市の日刊新聞、石巻日日新聞が特殊功績賞を受賞した。東日本大震災の直後、輪転機が止まるなど極めて深刻な被害を受けたにもかかわらず、6日間にわたって手書きの壁新聞を発行し続けた、ことが高く評価されたからだった。

その直後の10月1日、筆者は同社を訪れて竹内宏之常務取締役報道部長に会い、当時の状況を聞き書きした。以下は竹内氏の話である。

「3月11日は首の下まで水につかりながら市役所などを取材した。携帯も途切れ夜の8時ごろメール着信が復活した。しかし輪転機などは壊滅的打撃を受



け、やむなく手書きの壁新聞発行を決めた。小学生より下手な字だった。『それでもやめたら私たちの存在意義がない』と社長は言った。彼はウエットスーツの会社を経営しており日日新聞の経営立て直しのため社長に就任した人物で新聞づくりに関しては素人だ。その社長が先の一言を言ったのだった。』

苦難に耐えるDNAが同社にはある。戦前は軍部に最後まで抵抗し、紙の配給を止められ新聞印刷をストップされた<sup>6)</sup>。第2次世界大戦中軍部の報道弾圧は厳しく特に戦争が拡大した昭和13年ごろから、軍部の弾圧は日ごとに強まった。飛行場建設の位置を特定した記事を掲載すると「軍事機密に触れるので注意するように」と指示されたり「海運関係の施設に関する記事が新聞に掲載せざるよう特に注意するように」などの命令があった。

戦争の長期化による物資不足と日米戦争へと急旋回していく中で軍部と政府は昭和15年、全国の新聞を一県一紙に統合する方針へ打ち出した。社史は言う。「大正元年に創刊以来、血のにじむ思いで育て上げ、ようやく経営基盤も確立して30年。いかに特高の命令とはいえ、おいそれとは応ずるわけにはいかない。官憲の不法圧迫には断固として抵抗すべしなどの声援が相次いだ」という。結局記事の差し止めや発行停止という妨害手段に対し、発行を主張し続けたが、特高は最後の手段として取引先の紙間屋に圧力をかけ、用紙の供給をストップさせてしまった。紙が入手できなくてはどうにもならない。こうして昭和15年10月31日付発行「第8684号」をもって石巻日日新聞は発行を停止した。

武内常務の話が続ける。

「3月23日、突然、ワシントンポストの東京特派員が訪ねてきた。そして私にこう質問した。『なぜ君は（新聞発行を）あきらめなかったのか』。私は思った。この人は一体何を聞きたいのか。『あきらめたら終わりじゃないか』。そもそも私の頭の中に「発行をあきらめる」という選択肢がなかった。うちの社長はかねがね言っていた。『地域あっての地域紙だ。その地域がひどい状況に追い込まれる時こそ、あらゆる知恵を絞って書き続けなければならない』。私たちはジャーナリストであると同時にローカリストだ。』

石巻日日新聞の受賞は、ぺらぺらの手作りの壁新聞が、分厚い全国紙を凌駕したことを示した。宮古毎日新聞でみた工夫に加え、日日新聞のような強い意志で紙面づくりをすれば、地域新聞<sup>7)</sup>はまだまだ読者の支持を受け続けるに違いない。多様なメディアを維持することが、民主主義を支える重要な要素であることは、戦前の歴史が示している。

## 注 記

- 1) 「宮古毎日新聞五十年史」(同社発行) 16頁。
- 2) 営業畑出身で、同社の社長で営業出身は初めて。
- 3)

平成23年4月：沖縄県宮古島市の新聞掲載（宮古高等学校関連記事）	
1	H23. 4 / 1, 県春季高校野球宮高ベスト4ならず、宮古新報
2	H23. 4 / 1, 県春季高校野球宮高糸満に惜敗、宮古毎日
3	H23. 4 / 3, 国際交流意識をサポート・波平麻衣子、宮古毎日
4	H23. 4 / 8, 10RUNハーフへの案内・羽地洋平、宮古新報
5	H23. 4 / 9, WUB宮古マウイ交流から帰島、宮古新報
6	H23. 4 / 10, 10RUNハーフ被災者支援で350人参加、宮古毎日
7	H23. 4 / 10, 10RUNハーフ復興願いチャリティーフェスタ、宮古新報
8	H23. 4 / 12, 宮高1年生学習会、宮古新報
9	H23. 4 / 13, 4高校が嘉手納と交流試合、宮古毎日
10	H23. 4 / 13, 高校野球・宮古勢嘉手納と対戦、宮古新報
11	H23. 4 / 15, 投稿、沖縄本島宮古地区高校野球交流試合、宮古新報
12	H23. 4 / 15, 泊高校（宮古協力校）に11人が入学、宮古毎日
13	H23. 4 / 17, 10RUNハーフ支社協に義援金託す、宮古毎日
14	H23. 4 / 17, 1218週の思い被災地へ10RUNハーフ、宮古新報
15	H23. 4 / 17, 宮高嘉手納に競り勝つ・高校野球交流試合、宮古毎日
16	H23. 4 / 17, 高校野球交流試合・宮高嘉手納に勝利、宮古新報
17	H23. 4 / 19, 4高校野球部にボール寄贈、いくぞ甲子園応援団、宮古毎日

18	H23, 4 / 19, 4 高校野球部にボール寄贈、甲子園応援団、宮古新報
19	H23, 4 / 22, 地区校長会大型連休向け注意喚起、宮古新報
20	H23, 4 / 22, 地区校長会大型連休向け注意喚起、宮古毎日
21	H23, 4 / 27, 大型連休へ向け注意喚起アピール、宮古新報
平成23年 5月：沖縄県宮古島市の新聞掲載（宮古高等学校関連記事）	
1	H23, 5 / 2, 宮古バスケ協会設立記念大会、女子宮高Aが制す、宮古毎日
2	H23, 5 / 4, 10RUN ハーフご協力のお礼、宮古毎日
3	H23, 5 / 5, 宮高野球部早実・岐阜商に連勝、宮古毎日
4	H23, 5 / 8, マウイ島スクール体験交流帰国報告会、宮古新報
5	H23, 5 / 8, マウイ島スクール体験交流帰国報告会、宮古毎日
6	H23, 5 / 12, 宮高野球部名古屋遠征同行記、宮古新報
7	H23, 5 / 13, 宮古地区高体連夏季総体結果、宮古新報
8	H23, 5 / 13, 宮古地区高体連夏季総体結果、宮古毎日
9	H23, 5 / 13, 高校野球地区夏季大会・宮高優勝、宮古毎日
10	H23, 5 / 13, 高体連夏季総体代表選手が熱い戦い、宮古毎日
11	H23, 5 / 13, 地区高校夏季総体代表選手ら技競う、宮古新報
12	H23, 5 / 13, 地区総体代表選手力と技を競う、宮古新報
13	H23, 5 / 20, 県総体ラグビー宮古大会、宮高初戦突破に意欲、宮古毎日
14	H23, 5 / 21, 県高校総体ラグビー今日から宮古で熱戦、宮古毎日
15	H23, 5 / 21, 県高校総体宮古島大会開会式で健闘誓う、宮古新報
16	H23, 5 / 21, 水泳九州大会与那覇、砂川さんが出発、宮古毎日
17	H23, 5 / 21, 西日本年齢別水泳砂川、与那覇さん出発、宮古新報
18	H23, 5 / 23, 高校総体宮古島大会ラグビー宮高初戦突破、宮古新報
19	H23, 5 / 23, 地区高体連剣道女子個人奥平3連覇、宮古新報
20	H23, 5 / 24, 県高校総体宮古島大会ラグビー宮高4強入り、宮古毎日
21	H23, 5 / 25, 総体ラグビー宮高、強豪名護に善戦、宮古新報
22	H23, 5 / 25, 総体ラグビー宮高、名護に惜敗、宮古毎日
23	H23, 5 / 26, 県総体ラグビー選手奮わす「千の声」、宮古新報
24	H23, 5 / 26, 県総体宮古島大会ラグビー宮高宜野座に完敗、宮古毎日
25	H23, 5 / 26, 高校総体ラグビー3位決定戦宮高宜野座に惜敗、宮古新報
26	H23, 5 / 29, 宮高生徒10人介護リハビリなど学ぶ、宮古毎日
27	H23, 5 / 29, 県高校総体閉幕宮高・下里の活躍期待、宮古毎日

28	H23, 5 / 29, 県高校総体開幕全国目指し熱戦展開へ、宮古新報
29	H23, 5 / 29, 高校生サミット宮古島市で開催決定、宮古新報
30	H23, 5 / 31, 県高校総体宮高瑞慶覧1500M制す、宮古毎日
31	H23, 5 / 31, 県高校総体走り高跳び宮高下里 2 位、宮古新報

平成23年 6 月：沖縄県宮古島市の新聞掲載（宮古高等学校関連記事）

1	H23, 6 / 1, 県高校総体水泳女子バタフライ砂川史果100,200M制す、宮古毎日
2	H23, 6 / 2, 県高校総体瑞慶覧5000制す、沖縄タイムス
3	H23, 6 / 3, 新卒職業紹介連絡会議危機感もって対応を、宮古新報
4	H23, 6 / 3, 新卒職業紹介連絡会議雇用環境に厳しさを、宮古毎日
5	H23, 6 / 4, 南九州へ決意陸上優勝瑞慶覧、宮古新報
6	H23, 6 / 9, 県高校総体陸上 2 冠達成を母校に報告、宮古毎日
7	H23, 6 / 10, 県高校総体 2 冠の喜び母校へ報告、宮古新報
8	H23, 6 / 11, NHK 放送コン県大会宮高 6 部門で入賞、宮古毎日
9	H23, 6 / 11, 渡久山海里さん朗読部門で全国へ、宮古新報
10	H23, 6 / 14, 宮高生10人ホームステイに出発、宮古毎日
11	H23, 6 / 14, 宮高台北の姉妹校交流に出発、宮古新報
12	H23, 6 / 14, 全宮古ジュニアゴルフ選手権宮高浜川優勝、宮古新報
13	H23, 6 / 17, 高校陸上南九州大会下里 6 位入賞全国大会へ、宮古毎日
14	H23, 6 / 19, 宮高生徒10人台湾で国際交流貴重な経験積み帰島、宮古毎日
15	H23, 6 / 20, 宮高生徒国際交流で貴重な経験、宮古新報
16	H23, 6 / 20, 全国高校野球沖縄大会宮古勢初戦で姿消す、宮古新報
17	H23, 6 / 20, 投稿・姉妹都市交流マウイ島生徒受入について、宮古新報
18	H23, 6 / 21, スクール体験交流マウイ島から生徒 3 人が来島、宮古毎日
19	H23, 6 / 22, WUB 交流事業でマウイ島の生徒来島、宮古新報
20	H23, 6 / 22, 高校男子走り高跳び下里全国大会出場権、宮古毎日
21	H23, 6 / 22, 高校陸上男子走り高跳び下里君 6 位入賞、宮古新報
22	H23, 6 / 23, 宮古高校平和集会憲法 9 条理解深める、宮古新報
23	H23, 6 / 23, 宮古高校平和集会憲法 9 条理解深める、宮古毎日
24	H23, 6 / 25, YFU 国際交流カレン、サーシャさん、宮古新報
25	H23, 6 / 25, YFU 国際交流カレン、サーシャさん、宮古毎日
26	H23, 6 / 28, WUB 宮古・スクール体験プログラム、宮古毎日
27	H23, 6 / 28, WUB 宮古・フラダンス楽しみ交流、宮古新報

4) この前後の事情は「宮古テレビ30年の歩み～開局30周年記念誌～」104頁に詳しい。

- 5) 与那覇さんの独演ではなく、カナダ人の若い男性が話し相手になる。不思議なことに与那覇さんの言葉は理解できなくとも、この男性がたどたどしい日本語で質問するので、ようやく何が話されているのかが視聴者に分かる仕組みだ。
- 6) この間の事情は同社の社史「石巻の大正・昭和―古里と歩んだ石巻日日新聞の75年―」157頁参照。
- 7) ここでは県紙よりもっと狭い地域に配布される有料日刊紙を指す。

### 参考文献

- 「地方紙の研究」(鎌田慧、潮出版)
- 「戦後沖縄の新聞人」(真久田巧、沖縄タイムス社)
- 「沖縄の新聞再生」(比嘉辰博、新星出版)
- 「沖縄・戦後放送史」(宮城悦次郎、ひるぎ社)
- 「昭和の沖縄」(琉球新報社社会部編、ニライ社)
- 「沖縄戦後生活史」(沖縄タイムス社)
- 「沖縄言論統制史」(門奈直樹、雄山閣)
- 「アメとムチの構図―普天間移設の内幕」(渡辺豪、沖縄タイムス社)
- 「沖縄戦新聞」(琉球新報社)

